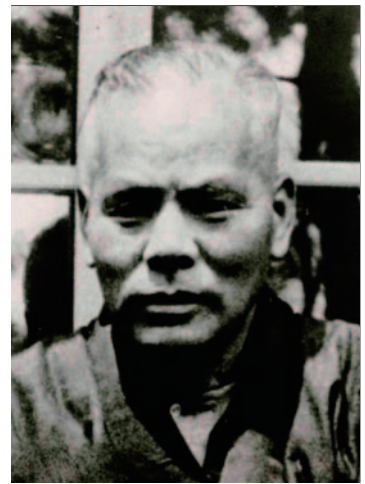




# 亡き友との誓いを胸に、 時代に翻弄されながらも 自分の運命を切り拓く

はまたに ゆう た ろう  
濱谷 勇太郎 (1875~1941年)



## 株式会社 電業

本社所在地：大阪府東大阪市高井田中2-5-25 従業員数：120名 資本金：9,800万円  
創業：1919(大正8)年5月  
事業内容：鉄道用電車線金具等の製造および販売

## 濱谷家の跡取りとして

**雨**の続く1893(明治26)年6月のある日、姫路市白浜町で塩田や廻船問屋を営む濱谷次平は、沈んだ面持ちで同じく廻船問屋を営む北風利八の家を訪れた。

「北風さん、最後のお願いです。家業を切り盛りしていた息子が急に亡くなって、75歳にもなった私では、もう濱谷家の商売を続けることはできませんのです。100人以上いる水夫や塩田の浜子たちを路頭に迷わすわけにもいかず…。無理を言っているのは承知です。ですが、なんとかお宅の勇太郎さんを、濱谷家の跡取りとして養子に貰わせてください。頼みます。お願いします」。

この二ヶ月程、次平は北風家の次男・勇太郎を養子に迎え入れるべく、利八に何度も何度も頭を下げにきていた。次平の息子・次郎七が突然亡くなったことで、濱谷家の商売は一気に滞り、この危機を打開すべく隠居していた次平が急遽跡取りを探すことになったのだった。

「濱谷家の跡取りを決めるという大仕事をやり残したままでは、死ぬにも死にきれんのです。お願いします。ワシの仕事を終わらせてくれませんか」。もう何度頼まれたか分からない程になった頃、北風利八は、ついに次平の熱意に根負けし、息子・勇太郎を養子に出すこと決めた。この時、勇太郎は18歳であった。



江戸~明治にかけて使用された千石船

江戸時代より海運の主力となった荷船。明治に入り、国内でも大手業者が蒸気船を扱うようになり役目を終えた。

## 自分が目指すべき道を求めて

**勇**太郎の生家・北風家は、古くからある神戸の回船問屋で、徳川の時代は大名のご用を勤めた名家であった。そうした歴史ある商人の家に生まれた勇太郎であったが、本人は『胆力に溢れた商売人』といった性分ではなく、物静かで落ち着いたある真面目な性格で、勇太郎自身もまさか自分が濱谷家の商売を継ぐことになるとは夢にも思っていなかった。

1894(明治27)年の正月、はれて濱谷家の長女・みつの婿として養子に入った勇太郎は、養父となった次平とともに濱谷家の立て直しに奔走することとなる。取引先との折衝や役所への対応、帳簿の管理から人事まで、次平は一日も早く、一時も早く自分の知識を勇太郎へ流し込もうと迫った。しかしながら、勇太郎にも自分なりの仕事に対する情熱があり、自分の考えるやり方を試してみたいという想いが強く、妻・みつが二人の間に入ることで何とか関係を取り持っていたが、衝突する機会は徐々に増え、やがて明確な亀裂となっていった。それに加え、勇太郎は塩田という仕事へも疑問を感じていた。塩田の仕事は、原始的かつ封建的で、毎日追い立てられるように続く重労働の連続であった。勇太郎は、浜子と呼ばれる従業員たちの多大な苦しさの上に成り立つ生活は、自分の生き方に合わないと感じるようになっていった。ある時、勇太郎は妻を呼び出し、自分には濱谷家の家業を継いでいく意思がないことを明かした。「ついにこの日がきたか」と覚悟していた妻・みつは、表立っては勇太郎の言葉に反対しつつも、こうなってはもう元には戻れないことを悟り、濱谷家を出て夫婦二人で生きていくことを決意した。

1902(明治35)年、養父・次平の反対を押し切り、勇太郎は妻・みつと二人で家を出て、近くの一軒家を借り、村の役場で勤め始めた。しかしその後、小学校に上がったばかりの息子を病で亡くし、また、濱谷家を出た自分への周囲の心ない評判にも耐えかね、10年間ほどを過ごした白浜という土地に根を下ろす気持ちをな

くしてしまった。そこで、北風家とも所縁があり、経済的にも発展していた神戸へ移り住み、警察官として働くこととなった。

この頃の神戸は、すでに外国人居留地を抱えた異国情緒豊かな街だった。居留地警察署に勤めることとなった勇太郎は、外国人相手の事故や事件にも対応する機会が多く、自然と異文化に親しみを持つようになり、また当時としては貴重な外国語を学ぶ機会にもなった。

## 平田善平との出会いと別れ

**暑**い夏のある日、仕事を終えて自宅に向かっていた勇太郎は、大きな体を必死にかがめて道で何かを探す男と出会った。男の名は平田善平、機械関係の輸入品を扱うイギリスの貿易会社・ヒーリング商会に勤める人物だった。滝のような汗をかき、ふらつきながら探し物を続ける善平を見かねた勇太郎は「私は警察の者です。疲れているようですし、すぐその私の家で休みながら事情を聞かせてもらえますか」と声をかけた。善平は申し訳なさそうに礼を言いながら勇太郎の家に入ると、しずしずと経緯を話し始めた。「実は、お得意さんから預かった茶色い封筒を今朝落としまして…。もし紛失となれば、私はクビです」。すると、善平の話をも勇太郎の隣で聞いていたみつが目を丸くさせて、奥から茶色い封筒を取り出してきた。「これ、近所のおばあちゃんが拾って『巡査さんに』って届けてくれたものなんですけど…」と言いかけた時、善平はそれをひったくるように取り上げ、中から油紙に包まれたこぶし程の包みを取り出した。「あった！よかった！これです！これは私が落とした部品です！」。子供のように喜ぶ善平に、勇太郎は「一体これは何ですか」と聞いた。「これは鉄道の部品です。実は、日本で走っている鉄道はすべて外国の部品で動いております。私は一日も早く、この品物を日本で作りたいたいと思っております、会社に内緒で日本の鍛冶屋に持って行って、どうにか日本でも作れんもんかと調査しておりました。その道中で落としてしまったというわけです」。先程までの狼狽した様子は微塵も感じられず、堂々とした面持ちで語られる善平の話に勇太郎は引き込まれていった。「日本の工業は、まだまだあかんです。鉄道や発電所の機械は日本で作る技術がないんです。私それが情けなくて…。でも、それもあとわずかの時間です。今にうちの商品をすべて日本人の手で作れるようになります。大いに矛盾してますが、私はそれを楽しみにヒーリング商会で働いています」。勇太郎は、一会社員の身でありながら、ここまで日本の工業界のこ

とを考えて思い悩み喜ぶ善平の姿に、本当の男の仕事を見た気がした。

それから、友人として気の置けない関係を築いていた二人だったが、ある時、勇太郎のもとに善平が仕事に倒れ入院したとの連絡が入った。慌てて見舞いに駆け付けた勇太郎の前には、生気を失った善平の姿があった。起き上がることも、上手く話すこともできなくなっていた善平は、勇太郎に「日本の工業技術を欧米に負けないものにする」という志を引き継いでもらいたいこと、語学に長けた勇太郎にヒーリング商会に入ってもらいイギリスと日本の橋渡しをお願いしたいことの2つを頼んだ。勇太郎は重篤の友の願いを聞き入れ、ヒーリング商会で善平の志を継いで働くこと誓った。

## 時代の流れに翻弄されながら

**1**909(明治42)年、勇太郎は警察へ辞表を提出し、ヒーリング商会へ入社した。当時の同社は、日本政府高官にもパイプを持つ一流商社の地位にあった。しかし、重役はすべてイギリス人で、日本の商習慣との摩擦から必ずしも経営はうまくいっているとは言い難い状況だった。勇太郎は警官時代に身に付けた語学力でイギリス人と日本人の間に立ち、様々な交渉にあたることとなり、通訳兼交渉窓口として、双方から大きな信頼を得ていった。

勇太郎が入社して数年後、日本社会はかつて善平が予言したとおりに変わりつつあった。全国各地でポツポツと芽吹いた国産製品が成長し、値段の高い海外製品を市場から締め出し始めたのだ。ヒーリング商会はたちまち行きづまり、本拠地であった神戸支店を閉め、会社機能を大阪へ移すと同時にイギリス人社員全員の本国引き揚げを決定した。

勇太郎はそれまでの働きぶりを評価され、移転先の大阪支店で引き続き本国との連絡役を任せられたが、一度流れにのった国産化の波は留まることなく、ヒーリング商会の日本完全撤退は、そう遠くないように感じられた。かと言って、善平の想いを胸にここまで励んできた仕事を途中で手放す気にもなれず、勇太郎はヒーリング商会が最後の時を迎える日まで骨身を惜しまず働こうと決めていた。



1914(大正3)年頃の四ツ橋付近

当時から大阪市民の足となり、1937(昭和12)年には総延長106.6kmとなった。

## そして、経営者の道を歩き出す

大阪支店に移って数日、在庫の整理をしていたある日のこと、勇太郎のもとに発電所関連部品や鉄道部品の販売を行う関西電業(株)の担当者が慌てた様子で訪ねてきた。現在行っている工事で、まだ国産化が追いついていない部品が欠品してしまい、販売元になっていたヒーリング商会を探してやってきた、とのことであった。すぐにこの部品を売ってくれ、と迫る担当者だったが、支店の中は神戸から運んできたばかりの数百種に及ぶ在庫の山で溢れかえっており、とても見つけ出せそうになかった。勇太郎が幾日か待ってくれと頼んだが、どうしても早急に必要だと食い下がる担当者は、ついに自ら腕まくりして在庫を漁り始めてしまった。根負けした勇太郎も一緒になって部品を探すことにし、結局夜中の2時になってようやく目当ての部品を探し出すことができた。はじめは迷惑な客だと感じていたが、無事に見つかった時の達成感はひとしおで、共に在庫の山に挑んだ関西電業の担当者に戦友のような感情を持つようになっていた。この男は、名前を山田といい、それから何かと勇太郎を頼って部品や技術の相談にくるようになった。関西電業と山田氏のおかげもあって、ヒーリング商会の商売は一時の賑わいを取り戻し、山田氏は勇太郎の重要なパートナーになっていった。

活況を取り戻したヒーリング商会だったが、1918(大正7)年に状況は一変する。大得意先となっていた関西電業の倒産が新聞各社で一斉に報じられたのだった。勇太郎は山田氏や懇意にしていた関西電業の社員のもとへ向かい励ましの言葉を贈ったが、みな一様に悲しみに暮れた表情をしており、倒産が覆りようのない事実であることを物語っていた。

倒産から一ヶ月後、勇太郎の家に関西電業の山田氏と工場長が訪ねてきた。「この度、何とか関西電業を再建しようという話が持ち上がりました。そこで、ぜひ濱谷さんに社長になっていただきたいと、社員全員で決めてまいりました」。あまりに突然のことに呆気にとられる勇太郎を前に山田氏は続けた。「50人の社員のためにも、工業製品の国産化のためにも、どうかよろしくお願ひします」。『工業製品の国産化のため』—それは自分をヒーリング商会へ導いた平田善平との誓いでもあった。とはいえ、勇太郎はとても即決する気持ちにはなれず、3日の猶予をもらって、その日の面談を終えた。『善平ならどう言うだろうか』—そんなことを考えずにいられない落ち着いた心持ちのなか、一通の手紙が勇太郎のもとに届いた。美しい字で書かれた手紙の差出人は、善平の妻であっ

た。それによると、平田善平が長い闘病の末、ふるさとの新潟で静かに息を引き取ったとのことだった。

同じ夢を追い、共に走った時間こそ短かったものの、常に心の中で自分を支えてきた仲間がこの世から去ったことで、勇太郎はあらためて善平との誓いを果たすために、自分という人間の力を大きくしていきたいと考え、関西電業の社長を引き受ける覚悟を決めたのだった。

1919(大正8)年5月、倒産した関西電業(株)を引き継ぐ形で大阪電業合資会社は誕生し、濱谷勇太郎は、その初代社長に就任した。

## 勇太郎の想いは世界へ広がる

社長に就任した勇太郎は、「一貫生産体制の確立」と「品質管理の徹底」に執念を燃やした。様々な機械や部品の国産化は日々で進んではいたが、輸入品との差は未だ大きく、前身となる関西電業の倒産も、部品の自社製造に失敗したことが一因となっていた。地道な試行錯誤を繰り返し、生産技術の確立を努めることは、勇太郎自身の「国産化」への夢の実現でもあり、大阪電業という会社にとっても悲願となっていた。また、鉄道部品の製造にあたっては不良品の一つたりとも許されるものではないという信条のもと、製品検査と品質管理を文字通り徹底的に行っていた。創業から2年ほどは、なかなか利益を出せず苦心することになったが、積み重ねた会社の信頼と、確かな精度を誇る様々な新製品の開発に成功し、大阪電業は業界の注目を浴びる存在へと成長していった。

その後は、全国の都市交通局・民営鉄道へ製品の納入を始め、日本国有鉄道の電化工事計画にも携わったほか、新幹線建設に部品の供給で多大な貢献を果たすなど、日本の鉄道界に欠かせない企業としての地位を固めていった。現在は、会社名を「電業」へと変更し、海外へも市場を広げるなどグローバルに活動を行い、時代の動きを鋭敏に感じ取った変革を進めている。

数奇な運命を辿りながら、無一物で身を興し、友の志を受け継ぎ、日本の工業のために身を賭してきた濱谷勇太郎の夢は、これからも電業とともに力強く広がり続けていく。

電業のつくる製品の一部

可動式プランケット(右)  
滑車式自動張力調整装置(下)

